



風船爆弾とジェット気流の話

生活の変化から来る有田焼のゆくえ

糸乗 貞喜

(佐賀県有田町における説明 1995.9 1996.1)

- 1 観光・サービス産業

問題発生から対応まで20年

「企業20年説」というのがあって、何でも発展して変曲点を迎え、20年すると衰弱するという考えがある。私は「地域産業30年説」というのを考えているが、企業でも地域産業でも長く続いているのは、落ちかけたところでロケットに点火している。つまり企業体質を変える必要がある。同じことをずっとやっていて20年以上続いている企業はない。

有田町は1965～70年に変曲点を迎え、1980～85年くらいで頂点に上り、そこでバブル景気がきたので、長くもったような感じになっているのではないか。

有田周辺の人口をみると、1990年までは有田町は減少しているが、周辺町は増えていた。しかし、平成7年の国勢調査を見ると、西有田町、山内町、波佐見町全て減少している。今までは有田町が周辺を支えていて、有田地域全体の親分の役割を果たしていたが、現在では危なくなっている。

「問題発生から対応まで20年説」というのもある。アメリカのピッツバーグというまちがあるが、第二次大戦後はもっとも発展したまちだった。ここを研究した人がいて、このまちが変曲点を迎えて落ち始めて、実際にこのまちが衰退していることに気がつくまでに7～8年かかっている。それから何をするかという方針が決まり、合意形成を得るのに、また7～8年かかる。何か始めても、すぐには効果は現れないもので、効果が現れるまでに、さらに5～6年くらいかかる。つまり、問題が起こって、次のロケットを打ち上げるまでに20年はかかる。

昭和50年頃、大阪市の仕事をしたときに、大阪のことを調べるためにピッツバーグのことを調べた。大阪は、昭和38年頃に変曲点を迎えている。そこから万博が45年にあり、終わった47～8年頃どうもおかしいということに気がついた。人口が

減っているのは、一時的なものではなく、構造的におかしくなっているのではないかということだった。最初は、人口を増やすために、結婚した若い人に金を出すとか、家賃をまけてやるとか、その場しのぎのことしかできず、まちをどうにかしなければならぬということには出てこなかった。昭和50年過ぎ頃から体質を変えるためにいろいろなロケットを打ち出し、現在は人口減少もおさまってきている。問題が発生して対応するまでには20年かかるということが人口問題でもいえるのではないか。

風船爆弾とジェット気流

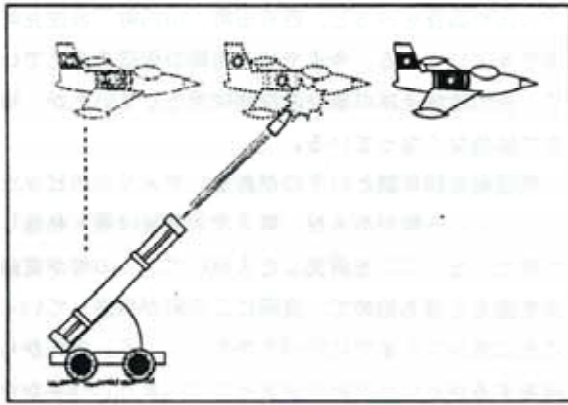
予測と計画というのはどういう関係にあるか話をしてみたい。戦時、高射砲でB29を撃つ場合、弾が届く間に目的がどこに行っているかを見通して撃つ。ところが、何度撃ってもなかなかあたらなかったらしい。何故かという、ジェット気流が吹いていて、計算よりも先の方にB29が行っていた。その後、このジェット気流を使って風船爆弾を飛ばしたらアメリカまで行くのではないかということに気がついた。

あるものをめがけて撃ってもあたらない。向こうが動いているということを考えて撃つとだいたいは当たるわけだが、もうひとつ要因がある。それがジェット気流である。

有田でいうと、飛行機がデパートや小売店や消費者などで、高射砲が焼き物を作る力や販売する力など有田の実力である。デパートの伸びや小売店をみて撃てば当たるかということそうはならない。デパートや小売店が社会的ジェット気流に流されている状態にある。

ジェット気流その 和食器を使う場が減少

このジェット気流の一つは、和食器を使う場が減っているということである。小売店がいくら売ろうとしても和食器を使う場が減ってはいは売れない。商業統計によると、家具建具什器の売り上



ジェット気流も計算に入れないと、弾は当たらない

げを見ると1980年頃から減ってきている。料亭や旅館も減っている。しかし、一般の食堂は増えている。家計の中では、魚介類や野菜などを食べるのが減って、調理食品と外食が増えている。被服等は価格破壊などで金額は減っている。その中で増えているのは交通費で、旅行はかなり増えている。これはモノではなく、直接遊ぶということをしたとみんなが思っていることを表している。

ジェット気流その 家族形態の変化 セット 買いから個買いへ

ジェット気流の二つめは、家庭が変わってきていることである。結婚する人が減ってきて、食器を使う場の家族が少なくなっている。家族人数も減っている。また、65歳以上の高齢者の高齢世帯が増えている。一世帯当たりの家族人数が3.1人、3人以下の世帯が60%以上になっている。食事の場の単位が小さくなっている。つまり、焼き物の一個買いが増えるということである。冠婚葬祭は全て外注で済ませることになっており、人並みに食器のセットがそろっていないと格好悪いというのはなくなっている。

一個ずつ違ったものを置いて、これはどこで買ったとかいう“話をできる”のが格好が良いということになってきている。器を使うときにそれにまつわる会話ができる、気分が通うということがもてなしになっている。

ジェット気流その 生活時間の変化 モノから 気分にお金を使う

ジェット気流の三つ目は、人が消費する金額では、旅行などの交通費や教養娯楽が増えていることである。時間つぶしに金を使う時代になっている。高齢者の娯楽・旅行は増えているし、教養娯楽費の中でもサービス分野、つまりモノではなく、

もてなしなどに対する出費が増えている。モノの部分は減って、時間を使うことにお金を使っている。

人はいい気分を過ごすために生きている。モノを買うときに気分がよかったり、モノを買わなくても気分が良ければそれでいいという感じになっている。

生活時間の変化をみると、仕事の時間が減って、通勤通学以外の移動時間が増えている。つまり旅行が増えている。他に増えているのは、趣味・娯楽・交際・つきあいである。ここをねらわないと儲からない時代になっている。

気分を売るまちづくりが必要

結局はそういう気分を売るまちづくりを、行っていかなければならないと思っている。

有田についても、その方向でまちづくりをやってほしい。簡単に言うと二本立ての商売が必要である。モノを売ることと、楽しい時間を過ごしてもらおうということ、気分とモノの二本立てが必要だと思う。今までの有田はモノだけで、時間をつぶすところがなかった。待ち合わせ場所や喫茶店がない。そういう場所がないとお客さんの支持は得られないのではないかと。

以前、嬉野の人に相談を受けたことがある。嬉野は客が来たら、工場に詰め込むように旅館に入れてしまって、そこでお金を取る仕組みになっていた。まち全体が工場になっていて町を歩けるようになっていなかった。一方、兵庫県の城崎温泉では、昭和40年代には団体を取り込んで旅館に詰め込んでいた。もっと町を歩けるような、商店街が発展するようなまちにしないといけない、ということで、その頃からまちづくりの総合計画策定を行い、商店街の整備、外湯の整備をした。その結果、外湯のはしごが出始めた。客は旅館だけに来ているのではない、まちを見に来ている。

有田も同じことが言えるのではないかと。有田駅

で、どこに行ったらいいかわからなくて困っている人が多い。有田の町並みは歩く値打ちのあるところで、それを来た人にわかってもらえるようにする必要がある。

モノを売るまちから気分を売るまちへ

結論を言うと、有田は町としての力が下がっているのに。世の中の動きを無視していたのではない。この動きにあわせて上がっていくために、ロケットの打ち直しをしなければならないと思う。

モノづくりのまちとしては大変立派だが、買うときの気分を引き立てるのはあまりなされていない。モノと気分の二本立て、つまり焼き物を売ることに同時にもてなしで気分を売る必要がある。また、魅力的なまちを活用してにぎわいの拠点を整備することが必要である。モノ、気分、場所の三位一体でまちづくりを行っていくことが望まれる。